

# 農業ビジネス 挑戦する若者

農家出身でない20〜30歳代が、農業に関連したビジネスに挑戦する例が目立ってきた。新規就農後に農作物の販売会社を設立したり、農業法人に就職したり。農業に新しい可能性を見いだそうとしている。

(西内高志)

東京都八王子市の株式会社「FIO（フィオ）」は、年間約50品目の野菜やハチミツなどを販売している。市内で就農した船木翔平さん(27)と伊藤宏さん(27)、就農を目指す大神辰裕さん(32)の3人が、自分たちで作った農産物を自分たちで販売しようと設立した。

市内の洋菓子店やレストランの一角を借りて収穫物を販売し、顧客を開拓。現在、レストランや居酒屋など10店舗以上に販売するほか、中華料理のチェーン店にも卸している。船木さんは「農産物を通して、地域の活性化にも貢献したい」と話す。業績を伸ばす農業法人に就職し、力を発揮しようとする学生

## 会社設立や法人に就職

も増えている。2年前から東京都内で年に3回開かれている合同説明会「アグリク」には毎回、70、80人が集まる。理工学部や法学部などの学生や大学院生も参加。昨春は10人が各地の農業法人に採用された。今春も15人が就職する予定だ。

大学で国際政治を学んだ妹尾侑樹さん(25)も2年前、説明会を通して、「こと京都」(京都)に就職した。京野菜の九条ネギの生産から加工、販売まで手がける農業法人だ。「食に関心があり、自ら作る側になって良い

で取れた農地を借りている船木ハクサイを手にするハクサイを手にする船木さん(左)。「農業を通じて地域に貢献したい」



年末に急須が壊れた。茶殻が流れないように内側に取り付けてある網が外れ、うまく元に戻せなくなったのだ。

いすゞ

義父の名残の急須にお別れ

処分しようと思うが、なかなかふんぎりがつかない。この急須は義父からもらった最後のものだからだ。

ある年から、お正月に帰省

ものを提供したいと思った」と話す。ネギを使ったドレッシングなどの通販事業に携わる。

農業を教える学校もある。農業ビジネススクール「アグリイノベーション大学校」(東京、大阪、愛知)は、社会人も学びやすい週末に開講。加工や販売、ブランド化など幅広く学べるコースがある。農家出身でない農地を借りるのが困難だが、その支援もする。4年前の開講以来、400人以上が受講。半分以上が20、30代だという。ウェブ制作会社を経営する成

田和正さん(30)は、この学校で農業を学んだ。今年、横浜市内で農地を借りて就農し、野菜栽培を始める予定。関係するギャラリーの喫茶コーナーで料理を出したいという。

農林水産省の新規就農者調査では、農家出身ではなく就農した20〜30代は、2007年度の約560人から、13年度は1430人に増えた。「アグリク」を企画するコネクト・アグリフード・ラインズ(東京)の社長、熊本伊織さんは「国産の農産物への関心が高まったりして、農業に可能性を感じる若者は多い。生産地と消費地をつなぐ役割を担いたいというケースも増えている」と話す。